



年間第 27 主日 (ルカ 17:5-10)

多い信仰ではなく、揺るぎない信仰を願う (2)

土曜日朝から、頭が痛くて起きているのが辛かったです。思い当たることは、金曜日に婦人会ミニバレー大会の練習に参加した後、ボイラーが作動せず、しかたなく水でシャワーを浴びたことです。これが効けたのかもしれませんが。でなければ、たまに悩まされている気圧の変化で起こる頭痛かもしれません。どうにも頭を働かせることができなかったのもので、今回の説教はかつて文庫本で出した 2004 年のものを参考にしました。

福音は、信仰を増してくださいと、弟子たちが願うのに答えて、イエスはからし種一粒ほどの信仰があれば、あなたにとって十分だ。問題はそれが揺るぎないものかどうかなんだよと教えてくださる場面でした。信仰はいかに小さなものであっても人をあっと言わせる大きな働きができるのです。

ここでもう一つ考えてみたいと思います。それは、信仰を増してくださいという弟子たちの願いは、少し的はずれだったようで、やんわりと断られたということです。つまり、人が神に願うことはいつも適切かというところでもなくて、的はずれな願いは取り上げてもらえないということもあるのです。

わたしたちの願いごとのうち、ある願いは、的はずれな願いに終わっています。信仰は願う人すべてに種として蒔かれます。からし種ほどの信仰で十分働く力を持っていると諭されたところを見ると、信仰を増してくださいという願いはおそらく的はずれだったのでしょう。むしろ「不信仰から立ち直らせてください」と願うべきだったのだと思います。

イエスは、信仰を多いか少ないかで考えている使徒たちに注意を促します。イエスは違う答えを示します。少ないと思われる「からし種」ほどの信仰で十分です。なぜでしょうか。それは、信仰は突き詰めると「神様を信じているかどうか」「信賴しているかどうか」だからです。

神を信賴している人はすでに十分な信仰を持っています。信仰とはその人が自力で何でもできるということではありません。その人には、神が信仰に答えて働いてくださいます。信仰が神を信じることと言い切ることができるのであれば、少なめに神を信じていますとか、多めに神を信じていますというのはいかにも的はずれだと思います。

では、信仰について何を願うことができるのでしょうか。わたしは、すでに信仰を持っています。神を信じているからです。信じていないという人は別として、もうすでに信じています。ですから、わたしどもの信仰を磨いてください。ふらふらしないようにしてください。こんな願いが適切かもしれません。

次に、善良で忠実な僕を紹介しながら、「あなたがたも同じこと

だ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」(17・10)という呼びかけをしました。これはじつは信仰を増してくださいという前半部分で考えた答えと深く関わっていると思います。

信仰が揺るぎないものとなるように、信仰に磨きをかけていただくように願うなら、その願いは取り上げてもらえると思います。結果、わたしたちがいただくものは、さらに磨かれた、ふらふらしない確信のようなものだと思います。そして、今日の朗読の結びでイエスが勧めている態度も、神が評価してくださるといふ確信がなければそれは言えない言葉だと思うのです。

「しなければならぬことをしただけです」。わたしたちは多くの場合、自分がしたことを並べたがります。覚えてもらうため、自分のことを良く思ってもらうためです。これもしてきましたあれも続けました・・・それは、裏を返せば、自信がないからそう言うのかもしれない。「しなければならぬことをしただけです」とは、よほどの自信がなければ言えないせりふだと思うのです。

せっかく願うのであれば、ふらふらしない信仰を願いましょう。イエスの前で「わたしは生きている間、しなければならぬことをしただけです」と、信頼のうちに自分をゆだねることができるように生活を整えていきましょう。それを可能にするのは、ふらふらしない信仰だと思います。そしてこの揺るぎない信仰こそは、わたしたちが願っているよいものではないでしょうか。